小峰みどりさんを悼む

財団法人　日本証券経済研究所
理事長　小　山　昭　蔵

日本証券経済研究所主任研究員として活躍していた小峰みどりさんが，昨年７月に48才の若さで急逝した。当研究所は，機関誌『証券経済研究』第６号に故人の友人，同僚諸氏の論文を収録し，これを「小峰みどり氏追悼号」として故人を偲び，その業績を記念する気持を表すことになった。

小峰さんは，昭和46年春津田塾大学数学科を卒業後，当研究所において前後25年間にわたり，一貫して証券市場研究者の道を歩んできた。その間の業績は本誌の巻末に整理してあるが，小峰さんは恵まれた数学の才能を生かして，計量経済学の手法による市場分析の分野で優れた論文や著書を数多く発表している。著書の中には『アナリストのための数学入門』のように長年にわたって多くの人に読まれ続けているものもある。また『計測室テクニカル・ペーパー』，『ファイナンス研究』，『証券資料』，『証券レビュー』等の当研究所刊行物に論文を発表するかたわら，いくつかの研究会で中心的な役割を果たす等して研究所の活動を支えてきた。研究所の外でも大学の非常勤講師や『証券アナリストジャーナル』編集委員等として活躍し，昨年４月には，有力な学者で構成される投信懇話会のメンバーに加わるなどして自らの研究生活に自信を深めているように見受けられた。

一昨年４月に研究所は，「証券会社の派生商品取引をめぐるリスク管理問題に関する研究会」を発足させ，日本証券業協会の支援を頂き乍ら７月上旬に報告書をとりまとめた。ずいぶん厳しい日程だったが，小峰さんは大阪研究所の吉川主任研究員とともにこれに参加して作業部会に貴重な資料を提出するなど活躍した。しかしその頃，病魔は既に小峰さんにしのび寄っていて，間もなく入院と通院治療を反復する日々を翌年の夏の初め迄続けることになる。あとで知ったことだが，主治医は早い段階から小峰さんに病名と進行状況について正確な告知をしていた由である。しかし自らの死を直視していた筈のこの時期，小峰さんは通院を続けながら何事もないかのように研究所に出勤し，研究会の世話をやいたり自らの研究に打ち込んでいて，最後まで平常と変るところがなかった。お別れ会の席

で夫君の厚友氏は，「みどりは頑張り屋さんでした。……最近とてもやり甲斐のある研究に取り組んでいると喜んでいた。」と語ったが，この時期何が小峰さんの研究心をこのように燃え立たせていたのであろうか。

平成8年7月6日，多くの人達の悲しみの中で小峰みどりさんは永眠した。そして日本証券経済研究所は才能豊かで頑張り屋さんだった一人の研究者を，それも研究者として大輪の花を咲かせ始めたばかりの時に失ってしまった。まことに哀惜の念に堪えない。